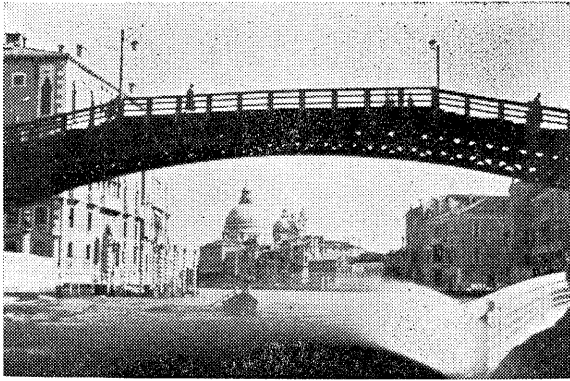


# ヨーロッパの旅

— ヴェニス —

平井信義



フェリーは橋の下を通っていく

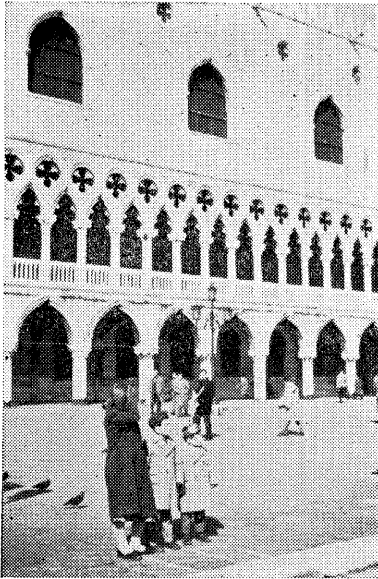
どこにいても、ひたひたと水音のするヴェニスである。初春の太陽をうけて、きらきら光る水面を見ていると、昨日までウィーンで震ふるに打たれていたのは、何か遠い以前のような気がする。

ウィーンを三月七日の夜、それも十二時近くに発ち、奥伊の国境を越えてヴェニスについたのは、翌日の昼近

くであった。両側に海をひろげた長い砂堤を汽車が走り切ると、ヴェニスの駅に着く。鉄道はそこで尽きているのであるが、汽車は間もなく折り返してローマへと向かって煙をあげていった。駅の改札口を出ると、そこには大きな水路が横たわっている。ボンボンボンとフェリーが岸については、再び同じ音を立てて去っていく。右から左へ、左から右へ、その動きはひっきりなしである。思えば、これがバスに該当するのであるから、当然頻繁なわけだ。自動車もない、自転車もない。水路のみが主な交通のために用いられるほかに、巾二、三尺の道が、家々の壁に隔てられて、迷路のように続いているだけである。

ホテル・ゲルマニアを出て、目の前に入ってきたフェリーに乗る。四、五人の人に混って、舟首のベンチに腰をおろした。雲一つない青空を、見上げるように舟は走っていく。間もなく、橋が頭上に迫り、その影を後に送る。空は更に明るく青い。ゴンドラが行き交い、

サ ン マ ル コ の 広 場



フェリーはゴンドラを追い抜いた。私は鼻唄を歌いたくなくなった。

水路の両側には、三階四階の家々が立ち並んでいる。赤い煉瓦を積み重ねた家が多く、その玄関の戸口には直接舟が着けるようになっており、恐らくゴンドラをつないでおくためであろう、三、四本の樺杭が水の中に打ち込まれてあった。古い家が水と接する辺りでは、煉瓦が朽ち落ちて、その部分に小さな波が打ち当たっている。

舟が波を立てたあととは、壁々にはねかえるしぶきも強い。

水路はうねうねと、右に左に大きく曲っていた。そこを下りながら、舟は幾度か左右の岸にある停留場をつないでいったが、遂に大きな白いドームが前方に見え始める所に来た。その後が広い海になっっていることは、空が低くなっていることで分かる。とっとな

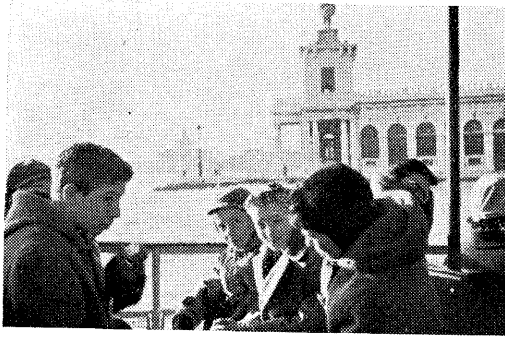
と音を立てながら、小舟は白いドームをめがけて走り続けていたが、間近にドームが迫ると左へと水路をたどって、右の岸を失った。まさに青い海が拓けた。

岸に舟が着くと、そこが有名なサンマルコの広場であった。ゆるぎなく、広大な建物が続き、まだ人気の少ないそこには、たくさん人の鳩がかたまりとなり、首を振り振り右往左往していた。一群が舞い上ると、一群が舞い下りてきたりした。傾き始めた日射しをうけて、その羽音のみが、大きな建物に反響するようであった。私はひとり石畳の上に腰をおろして、建物で四角く区切られた青を眺めていた。イタリィに来たのだ。ヴェニスに来たのであった。

二人の男女が私の前を通って、海の見える側のベンチにそれぞれ私に背を向けて腰をおろした。二十才前後のむしろ黒い髪をした青年たちであった。一群の鳩がその後を追って歩み寄り、首を立てて見上げるようにしたが、相手にされないか、二、三羽がもと来た方に歩みをかえると、他の鳩も一斉に向きをかえて立ち去った。

男の方がポケットから新聞紙の半分ほどの紙片を取り出すと、二人は顔を合わせるようにしてしばらくそれを読んでいる。一枚が終ると、それを後へ廻しては次の紙片に目を落している。三枚、四枚と、かなり長いものであった。それを読み終ると、男はいきなりその紙の束を二つに裂いた。四つに裂き、八つに裂いた。そして粉ごなになるくらいにまでひきちぎってから、ひとり岸壁に近寄り、それを海に向けて投げた。さっと吹き寄せて来る風によって、紙片は

子どもたちは船で学校に通う



翌朝、再びホテルを出ると、同じ船着き場からフェリーに乗った。舟は同じコースを辿っていくが、お客は大半が小学校の生徒であった。思い思いの帽子をかぶっている。烏打ち帽子の子どももいれば、登山帽をかぶっているものもある。茶の外套を着ているものもあれば、白いスエーターのものもいる。登校の途次で

その男にふりかかって石畳の上に散った。それを気にもとめず、男は再びベンチに腰をおろした。そして、いきなり女の首を抱いて、唇を寄せた。女の唇も、吸いつくように男の唇を求めた。二人はそのまま、いつまでも、いつまでも唇を押しあてて身動き一つしなかった。

その時、女の子が二人、鞆も背負わないでベンチの側を通った。学校からの帰りらしい。足並みを揃え、せせせと帰路を急いでいく。ベンチの上での若い男女の営みには、目もくれずに歩み去っていく。私は、我に返ったように石畳から腰を上げた。

あった。子どもたちは、学校へ舟で通い、舟で帰るのであった。みな外套を着ていたし、中にはその襟を立てている子どももあった。肩から下げるようになった鞆を手にかかえている子どももいたが、教科書とノートとを無雑作にかかえたり、バンドでしばったままの中学生もあった。ちょうど白いドームの方から射してきた朝日をそれぞれ顔に受けて、顔々々白く美しく輝いていた。

イタリーに入つてすぐに気がついたのは、若い人たちの顔立ちが美しいことであつた。殊に女の人が美しかった。汽車の中にも二、三人とは言えないほど、鼻立ちが整い、目がまゆ毛の下で刻まれて茶黒く、口元がふくらみをもって締め、顎にたてのくびれを持って……。ヴェニス の停車場にも、十七、八才になる女の人が、細い足を真つ直ぐに立てて立っていた。これは、間もなくミラノを訪れた時にも感じたことであり、スカラ座の芝居の幕合いに、テラスを歩き廻る楽しみになったことでもあつた。ドイツに滞在している時にはほとんどないような楽しみであつたので、後にドイツ人の友人にそのことを話したところ、彼は即座にいった。「美しいことは認めるが、早老ですよ。三十を過ぎると、じきに皺がよつてきたりするのでですよ。ですから、我々はイタリーの女性とは結婚しようと思わないのです」——結婚前の若い医者 の返事であつた。

しかし、こうしてフェリーに乗り合わせた女の子の顔立ちも美しかった。まだ思春期前のように見える子どもたち、わずかに胸のふくらみを思わせる衣服の上に、じつと見詰めていては悪いような真



つ白な肌の頬をのせていたし、朝日をうけてまぶしうに目をしばたいたその目付きも、黒いひとみをうすいヴェールでかくすようであった。

西洋の彫刻を載せた書物でしばしば見たヴィナスの像。あの時代と今とでは、はるかな隔たりがあるが、当時の面影がこのような子どもたちの素顔に残っているのであろうか。早く年を取っていく人たちであるかもしれない。しかし、最も美しい花を、この年頃から青年期にかけて咲かすことが出来る人たちであることが、この国に住む一つの幸福であるように思えてきた。特に鼻立ちの美しさ—ある時、日本にいたことのあるドイツ人と、鼻立ちについて話し合ったことを思い出す。私は、ヨーロッパに來て女性の顔について第一印象は、鼻が高いことであり、それが美しさをひき立てていることを指摘した。しかし、そのドイツ人は、日本の女性の鼻が、非常に愛くるしいことを指摘した。私はそれを「お世辞だろう」といってまじめに受け取ろうとしなかったら、そのドイツ人

は真剣な顔つきで、同じことを主張して譲らなかつた。私は仕方なく「低いものは高いものを望み、高いものは低いものを望むですね」といって笑い出してしまったことがある。

このようなことを思い思っている時、フェリーは小さな船付場につくと、ひとりの男の子が飛びのつて來た。脇に学校の道具をかかえていたが、船のベンチに腰をおろすやいなや、それを放り出して、外套のポケットから何枚かの札を出した。メンコのような、家族合わせのような札であった。一、二枚取り出してはそれを揃えている。何の屈託もない。短いひさしの烏打帽子の下の目は、メンコを揃えることに集中している。学校で友だちと勝負をするための道具なのであろうか。あるいは、母親から禁止されていた遊び道具を、その目から逃れた場所で鑑賞しているのであろうか。次の船付き場に止った時に大勢の子どもが乗り込んで來ても、彼はその方に向目に向けようとしなかつた。トコトコと船の振動を楽しみながら、十枚、十一枚と片手には持てないほどの宝物がポケットから出てくる。世界中いづこも同じ子どもたちの姿を見て、私の顔には微笑が湧いていた。

サンマルコの広場にある船付場にフェリーがつくと、その男の子は、真つ先に飛びおりて、走るようにして姿を消し、そのあとを三五五、子どもたちが大声で話をしながら続いていった。私の足も、その子どもたちを追って、寺院の裏から細い露路にまがり、ゴンドラのつないである石の橋を二つ越えた。その突き当りに、古い

鳩が群がるサンマルコの広場



大きな建物があった。その横手にある小さな入口から、子どもたちは次々と姿を消していく。そこが学校であった。入口の上は既に苔にしみて、陽の当たらない狭い露路の光を鈍くうけていた。私はしばらく入口の側に立って、吸い込まれていく子どもたちの姿に目をやっていたが、子どもたちは私の姿を認めないかのように、あるいはチラッと私を見ても、急ぎ足に学校の中に入ってしまった。

今頃日本の子どもたちは——と私は故郷に思いを返した。ちょうどヨーロッパより八時間遅れているわけであるから、真夜中の十二時。ほとんど大部分の子どもが、貧しい日本の建物の中で、畳の上で、ふとんにくるまりながら、安らかな睡りに落ちているにちがいない。ふとんの中で眼をつぶってしまうと、もうどの子どももや

海は遠く続いている



らかな寝息をたてているはずである。祖国の子どもがひとりでも多く、幸福な生活を営んでくれたらと願う気持ちがひしひしと迫ってきた。

間もなく、学校の入口を離れると、もとの道をもどって、再びサンマルコの広場へ出た。そこには太陽がさんさんと輝いて、教会の高い屋根の影が日当りの広場を斜めに横切っていた。昨日に交らず、鳩の群が、手前の影の中に一

群、日当りに一群、左に右に動き廻っていた。パン屑をもった母子の姿が御堂の中から出てくると、それらの鳩は一斉にそちらへ歩みを進め、慌てた鳩どもは羽ばたきを立てながら飛び立ち、飛び降り、ひしめき合い、中には子どももの肩にとまったり、母親の胸にとまろうとして、更に羽ばたいたりした。

目を遠くにやると、海は青く輝いていた。そしてゴンドラのいくつか、岸を離れていった。その擢の動きが、私の心を誘うように波の上をゆれていった。